

グリーン  
マーガレット



mikatuki98

## # 1 「記憶のニオイ」

---

宿舎の狭いエレベーターの中は、外国産のニオイのきつい香水で満ちていた。いつも鼻づまりの香織だがニオイだけは敏感で、余りのニオイのきつさに直ぐ鼻を覆った。多分、さっきフロアで見かけたアメリカ人女性たちのニオイだろう。

3階で一人の体格の良い男性がエレベータに乗って来た。先客の香織に軽く会釈をして男性は紳士振りを見せたが、香織はまた直ぐに鼻を覆いたくなかった。けれどそんな仕草をしてしまっは相手に失礼だと思い我慢をする。この微妙に記憶のあるニオイは、何だろう？

香織の部屋は5階にある。男性がもし、それよりも上の階なら、しばらくの間この謎のニオイと付き合わなければならない。ところが男性は5階のボタンを押した。『同じ階なんだ……』

5階に到着すると、ドアに近い男性が先に降りるのを待つ。しかし、やはりは紳士的にどうぞ！ と掌を差し出し香織を優先した。『白い！？』

手の甲の色黒さに対比して掌が以上に白く感じた。降りる間際、香織はチラリと男性の顔を見上げた。ニッコリと微笑む男性。香織はその瞬間、男性のニオイの記憶が甦った。「そうだ！ これは百獣の王たちのニオイ！ アフリカの大地のニオイだ！」 了

## # 2 「寝るに限る」

---

「あ～肩が痛い><」

「では、今夜あたり如何ですか？」

「あ～腕が痛い><」

「では、今から如何ですか？」

「あ～指が痛い><」

「では、そろそろ始めますよ！」

誰かが何かの痛みを訴えたとき、  
知らんぷりをすることが巷では流行っているらしい。  
ちょっと前までは、自分の痛みをもっとオーバーに  
いい被せることが主流だったが、

【めんどくせー】という言葉が流行りだすと、  
自分の事を説明するのも「めんどくせー」ということにな  
ってしまっているらしい。

かくて、「では、……」で始まる一連の台詞も  
随分浸透して来ていたが、

【めんどくせー】の勢が強すぎて、  
いずれ何かしらの台詞を吐くことも【めんどくせー】となり、  
誰かが何かの痛みを訴えたときは、  
黙ってその場から退散して  
布団を被って「寝るに限る」ことになるだろう。 了

### # 3 「九一郎と十子」

---

九一郎（くいちろう）お爺ちゃんの還暦の年に十子（とうこ）が生まれた。  
だから九一郎お爺ちゃんと十子は丁度60歳違いだ。  
十子は干支が同じことが一寸嬉しかった。

十子が3歳の時だった。  
生まれてからずっとパパっ子だった十子が、パパを大嫌いになる事件が起きた。  
十子にとって、パパはいつでも十子の気持ちを一番に考えてくれる存在だと思っていた。  
だけど、パパは自分の我を通してしまったのだ。  
それ以来、十子はお爺ちゃん子になった。

パパから貰えなかった愛情を埋めるように  
十子は九一郎お爺ちゃんにベッタリくっ付き離れない。  
週末にしか会えないから尚更、会える時はベタベタだ。  
時が経ち、無常にも九一郎お爺ちゃんは寝たきりになった。  
いっそう十子のお爺ちゃんを想う気持ちが増した。  
だけど、お見舞いも時々しか行けない。

そして十子が最期にお爺ちゃんと話したのは、電話だった。  
「もう一度、十子ちゃんの声が聞きたいと思ってね……」  
「うん。 電話ありがとう。 お爺ちゃん、元気になってね」  
「十子ちゃんに会えて良かった。 ありがとう……」  
十子は何も言えなかった。  
だけど、十子はずっと心の中で言い続けている。  
「九一郎お爺ちゃん、ありがとう。 お爺ちゃんのお陰で  
十子はずっと淋しくないよ」 了

## # 4 「青貝殿と赤星殿」

---

「青貝清兵衛（あおがいせいべえ）殿！」

「おお、これは赤星碩介（あかぼしせきすけ）殿！」

「ご無沙汰でござった」

「あいや、拙者こそ不精をしており申した」

「して、今日はどちらへ？」

「ふおふおふお、恥ずかしながら卓球なんぞにハマリ申してのお」

「ほう！ 拙者は双六にハマってござる」

「ほう！」

「……」

「……」

「では、また」

「では、また」

青貝清兵衛と赤星碩介には利害関係も無かったが、  
古くからの知り合いというだけで、  
お互い何の関心も無いのであった。 了

## # 5 「必要性」

---

授業が終わると講師は生徒である二人の女性の前に来て言った。

「この後予定ある？ 時間があるならお茶しませんか？」

二人の女性は顔を見合わせ、どうするとお互い小声で聞きあい、

少しの時間ならと付き合うことにした。

あっさりとは断るには講師に悪いという大人の女性の判断と言えるか否かは別として、

二人の女性は一人ではないことで安心したに違いない。

講師の足取りは二人の女性の存在をまるで無視しているかのように速かった。

「ちょっと、わたしあの速さについていけない。 行くのやめるわっ！」

一人が足を一旦止めて、もう一人に訴える。

「えー、わたしも一人はいやだわ……」

もう一人も訴える。

その間も講師は振り向きもせず、わが道を足早に行く。

二人の女性がやっと追いついたのは喫茶店の入り口だった。

とりあえずは講師は二人を待っていたのだろう。

講師は一級建築士であるという肩書きを今更ながら二人の女性に訴える。

ただ黙して頷きながら話を聞く二人の女性。

講師は一頻り妻の実家に建ててあげたお茶室の自慢をすると、

次の講義の時間だと中途半端なお茶代の残し、喫茶店をあっけなく出て行った。

静かになった席で、二人の女性は飲みかけのコーヒーを飲み干しながらも、

自分たちの必要性を特に語り合うこともしなかった。

ただお互いが、あの講師よりは自分たちは大人だね、と言って慰め合った。 了

## # 6 「酸っぱい甘夏柑」

---

「自然落下した甘夏柑が地面に転がっているのに気が付くと  
気付いてもらった甘夏柑はホッとして笑って待っているんだよ。  
でも、拾って来た甘夏柑が先に拾われた甘夏柑に並べられ  
いつまでも様子を見に来てくれないと、  
あの日笑顔を見せた甘夏柑だってことを忘れられたと思って、  
甘夏柑は淋しそうな顔をするんだよ」

なんてお話を、昔々、アパート暮らしで小蜜柑しか食べれなかった  
幼い頃の自分に童話のように語ってあげながら、  
強風で落下した、まだ一寸酸っぱい甘夏柑を  
丸々一個ペロリと平らげた夜は、唇が何だかヒリヒリして  
柑橘類特有の香りが息をする度に鼻をくすぐる。

雨足が強まって来た音とCDから流れるマッキーの  
何となく懐かしい声がBGMだったことに、ふと気付いた。  
「あした、甘夏柑がまた一つ、落ちているかもしれないな……」 了

## # 7 「ラーメン」

---

人が並んでいるラーメン屋はさぞかし美味だろうと店に入って注文したが、背中から注文したラーメンを差し出された。いきなり肩越しから出されたラーメンに驚いて、ラーメンをテーブルに置いた店員を見たが目を合わさない。

忙しいからかと思ったが、目の前のサラリーマンにはお待たせしましたと言いながら笑顔で横からラーメンを差し出した。

これが普通なのに、サラリーマンだけ特別待遇のように感じられてコチラは不快になる。

それでもラーメンが美味ければそれでヨシとしようと一口スープを飲んで吐き出しそうになった。

『不味い！』

明らかに自分の味覚にはそう感じられた。

渋々麺だけを食べようとしたが、沁みこんだ不味い出汁が麺に絡んで一緒に口に入って来る。

ガマンして半分だけ食べたが、そこで限界が来た。

客は耐えることなく入れ替り立ち代り、店は繁盛している。

清算を済ませると無言で店を出てバス道路に向い、車の往来の激しさと騒音の中、白昼夢でも見たのだろうと思った。 了

## # 8 「ミーちゃんのしっぽ」

---

ミーちゃんのしっぽは少し短いのです。

なぜって、お散歩の途中で先っちょがプツッとちぎれたからです。

確かあの道のあの角を曲がる時、何かに引っ掛けたんです。

だけど、丁度ブルドックのブルオが大きな声でミーちゃんに吠えたので

ミーちゃんはビックリしてダッシュダッシュ！

引っ掛かっているしっぽに気付かずに、大慌てで逃げました。

しばらく経ってジンジンとしっぽの先っちょが痛み出しました。

「痛いよ～痛いよ～痛いよ～」

ミーちゃんは3日3晩泣きつづけました。

でも、ミーちゃんのしっぽの先っちょは、ちゃんと元のようになり丸くなりました。

白い毛に少しだけ茶色の斑点が所々あるミーちゃん。

元気になったミーちゃんがお散歩に出かけると、

例のあの道のあの角で、トラちゃんがミーちゃんの前を横切りました。

何だか、トラちゃんのしっぽは少し長くなっています。

不思議に思ったミーちゃんは、トラちゃんのしっぽをジーッと見ました。

すると、トラちゃんの縞々のしっぽの先っちょは、

ミーちゃんと同じ毛の色でした。

## #9 「いない手紙」

---

手紙を手書きで書くのに、こんなに時間が掛かるものかと葉子はパソコンのメールに慣れてしまった後で改めて気付いた。相手の為に時間を掛けること、そのものが愛ある行為のように思える。パソコンのメールだからと言って、手書きの手紙よりも愛が少ないとは必ずしも言えないが、パソコンのメールには気が籠もらないは本当のようだ。

葉子は体調が少し回復したので、手紙を書き出すとメールで約束していた知人に可愛い便箋とお揃いの封筒を用意して就寝前に手紙を書き始めた。肩や腕の疲れが完治していないのか、ボールペンで書く字が乱れてしまう。書きたいことは山ほどあるから、徐々に加速して行くに連れ、益々乱筆になる。それでも、気持ちは手からペンを通して便箋に綴られた文字に刻まれた筈だ。

翌日、葉子は久し振りに外出して、家から一番近いポストへ手紙を投函した。やっと口に出したことを実行出来た達成感と、きっと喜んでくれるだろうという期待感。お天気だったせいか、心も軽やかになっていた。

「あ、そうだ！ メールで手紙が到着する日をお知らせしておこうっと」

ところがメールの返信を読んで葉子の心は凍ってしまった。

「昨日のメールを読んでないのですか？ わたしは手紙はいないと言いましたよ！」

葉子が手紙を書くのが遅れた理由を伝えた後に来た返信メールには、確かに「手紙はいない」と書いてあった。しかし「手紙を投函しました」と言った葉子に対して「いない」という言葉。果たして葉子の手紙は、封を開けて読まれるのだろうか？ 葉子はその是非のメールさえも、もう欲しくないと思った。 了

## # 10 「小さな森」

---

住宅地に残されていたささやかな杉の森が、徐々に削られていく音に足を止めた。

赤土がむき出しになり空の青の面積が広がっている。

今年の春はもう、野の草花は咲かない。

記憶の中に咲き続けていくだけ。

「景色が変わりましたね」

通りがかりに近所の人に声を掛けられた。

「ええ、唯一の……」

「小さな森みたいだったのにね」

言葉をつないでくれた。

消えてゆく形たち。

残っていく記憶たち。

ツユムラサキの花と野イチゴの花。

紫と白。 了